

書簡と日記に見る一九三〇年代における

『チボー家の人びと』の作者

——三〇年代初期における作者の歴史的意識と作品計画の大変更——

店 村 新 次

同志社大学人文科学研究第三研究所の或る例会で、私はマルタン・デュ・ガールの『チボー家の人びと』の中
断と計画大変更について、研究発表と呼ぶほどでもないごく要約的な紹介を試みた。そのとき私は、マルタン・デ
ュ・ガール自身がその『自伝的文学的回想』のなかで述べているような、一九三一年一月一日の自動車事故に続
く療養生活が『チボー家の人びと』の来しかた行くかたについて作者に省察の余暇を与え、これが作品の長い中
断と計画大変更へと作者を向かわせたという告白の内容は、じつは一面の真理を要約して述べたものに過ぎず、
むしろその余暇が作者をして、みずからの作品とそれを書きつつあった一九三〇年代という時期における作者の
歴史的意識とのずれに思いいたらせ、その創作生活に重大な危機をもたらしたというのが事実なのだ、と考えね
ばならぬ点について言及した。そして、これがマルタン・デュ・ガールの制作態度から、とはつまり、常に或る

歴史的事件から一定の時間的距離というワン・クッションを経たのち、広範な資料踏査という努力を積んで成される彼の創作方法というものから、必然的に生ずる結果であったことについて述べた。以上のことは別に私が初めて触れる事柄ではない、多くの研究家が熱意をこめて論ずるこの作者における一つの興味の焦点とも言うべきものなのである。しかしこのような、作品の内容と、作者の意識と、その時代、との関係の問題は、アメリカの歴史学者デイヴィッド・ショウク氏も指摘するように、作家と歴史という見地から見ても非常に興味ある問題であるので、第三研究の「一九三〇年代とヨーロッパ知識人」という命題を持つ研究に参加したことを機会に、これをいまい少し詳しく跡付けてみたいと思うのである。

このような観点から、私は主としてこの作家がふたりの親友つまりアンドレ・ジードとジャック・コポー、およびその他の人びとと交換した書簡、ならびにマルタン・デュ・ガールの『日記』を検討することにより、この問題をいささか敷衍してみたいと思うのである。なぜ書簡や日記を研究資料とするかという理由は、もっぱらこの作家の性格とその処世態度というものに存在する。すなわち人も知ることく、マルタン・デュ・ガールは芸術作品の出版という場所以外では自己表明を意識的に避けた人であり、常に人眼を遠ざけて隠れ住み、およそ人びととの会見や雑誌などへの寄稿を極端に嫌った人であって、彼の作品以外に彼の内心を探ることを許さないという人物だったからである。このときに、最近にいたって発表された彼の大部の書簡集や『日記』は資料的に見てきわめて重要でもあり、またこの際唯一のものとも言える文献となるわけである。そこには『チボー家の人びと』の中断と計画変更およびその後の制作の苦心の時期における彼の内面が忌憚なく、また真実をもって吐露されていると言つてよい。そして、これら書簡にうかがわれる彼の歴史的意識は、作品制作さなかのこの作者の意

識ということになり、そのような意識のうちに制作された『チボー家の人びと』の後半すなわち『一九一四年夏』と『エピソード』は、一九一四年という、およそ十数年前の第一次大戦を内容とし、そこに三〇年代の作者自身の意識が反映される。このような三重の構造が、作者とその制作に当たった時代との関係という点で、大きな興味をそそるのである。ジードは『ジャン・バロワ』出版の一九一三年から一九五一年のジードの死までこの作者が最も深く親交を交した人であり、またコポーも同じ一九一三年から、演劇を通じて兄弟のように親しんだ相手である。ジードの往復書簡集は一九一三年から一九五一年に及び、コポーとのそれは一九一三年から一九四九年に及んでいる。こうした書簡や日記には無口な男であったマルタン・デュ・ガールの真実の声が記録されている。そこには文学制作上の問題はもとより、私生活上のこまごました点にいたるまでの打ち明けが見られるのであるが、今回はそのうちから、文学史に名高い『チボー家の人びと』の計画変更を中核とする、一九三〇年代初期における、知識人としての彼の意識と態度を再検討してみたいと思うのである。

☆

まず順序として、作者自身が『回想』のなかで計画大変更のきっかけとなったと述べている自動車事故とその後の病院生活、並びに劇作品『無口な男』の着想と『出航準備』の破棄について復習しておく。

一九三一年一月一日の夜ベレームからル・テルトルの家へと向かう細道で、夫人のエレーヌが運転していた自動車は横滑りした。マルタン・デュ・ガールは俳優のルイ・ジュエヴュに次のように説明している。

あれは大部分私の過失でした。エレーヌは自動車を飛ばしていた。横滑り、ジグザグ運転。私が妻の腕に掴まり、彼女の

運転を妨げたのに違いない。狭い道、溝。自動車は大破。夜のなかから私たちを救い出すのに、五人がかりで三時間近くもかかりました。

これより簡単だが、これと殆んど同じことを、一月七日付の手紙でコポーに知らせている。

傷ついた夫妻はル・マン(訳註||パリから二〇三K。サルト県の県庁所在地。)のバロン通り三十二番地の病院に運ばれ、ここで二か月以上を過すことになる。マルタン・デュ・ガールはギプスをはめられ、まるでツタンカーメンのように包帯に包まれて、身動きもできずに過した。この間の出来事について彼自身『自伝的文学的回想』のなかでは次のように書いている。

ギプスのなかで身動きできぬ数週間のあいだ、私は作品についてゆっくりと反省する余裕があった。ところが『出航準備』を完成し出版する時宜について、大きな疑いにとり憑かれてしまった。仕事を急に停止したことが、眼をとつぜん開いてくれたのだ。そしてもし十年まえにたてたあの『チボー家』のプランに忠実に従ってゆくとしたら(それまでに計画の三分の一しか実現していなかった)、あと一五冊、あるいはそれ以上を書かねばならなくなるだろう、ということに気がついた。もつともそれができないと感じてはいなかった。主題にいささかも疲れは感じていなかったから。最初のプランによく導かれて、一冊一冊とあの息の長い作品に突き進み、その間に一種の安定感に支えられ、それが躍動をたやさずにきたのだ。しかし病院の静けさと孤独のおかげで、一歩退いて『出航準備』を考えてみると、急に自己満足に陥っていたという感じ、そして、気づかぬうちに、物語りの流れをひどく遅らせているという感じを抱いた。もし計画に囚われて、すでに出版した七巻にさらに一五巻を加えたり、これはどうなることだろう? そのようにしてこの小説を法外に長くしたら、読者を飽かせるという危険だけでなく、私が大きな価値をおいているもの、つまり作品の統一と釣合いを、取り返しつかぬまでに

危うくするという危険を犯すことになるだろう。病院のベッドの上で、この考えを検討すればするほど、ますます後者の危険が重大に思えてくるのだった。

私はまず妥協を考えてみた。当然の結果として、計画を縮小し、思いきった伐採作業にとりかかる決心をした。しかしすぐに、この決断が実際上、いかに実現不可能かがわかった。

(最初の計画では、ジャックだけが戦争で死ぬ。アントワーヌは無事に帰ってくる。そしてジュニーと結婚し、彼女を助けてジャックの遺児ジャンポールを育てる。その結婚から、アンヌマリーという娘も生まれる。数多くの事件がすでに考へてあり、それらが、戦後フランスの特殊な背景の上に、一人の偉大な開業医の生活や、ジュニーとアントワーヌの性格の進展や、彼らの夫婦生活のむずかしさや、子どもたちの教育と発達やらを浮き彫りにする役をはたす。複雑で、とくに悲愴なエピソードが、全体の終わりの巻の一つを占めることになっており、これはジャンポールが中心になる。ジャックとジュニーの熱烈な性質を受けついで、ジャンポールは二十歳にして狂気じみた冒険にとびこんでゆく。親友の妻を誘惑し、恋人の名譽を救うため、アントワーヌの召使いをピストルで撃つ破目になる。この召使いが若いゆすりの名人で、姦通を見つけ、言い訳のたため告発的な文書を盗みとって、それを夫に手渡すとおどしたからである。パリ中の醜聞、裁判、その他。すべてが劇的効果を盛り上げるよう、こまかく組みたてられていた。この探偵小説的データを用いて、私は純粹に心理的な作品を書こうと自負していた)

検討してみると、このプランを刈りこむということは不可能に思えた。私の準備していた長い物語は、諸事件の累積をこまかく研究したそのつながりを尊重するものでなければ、成り立たない。すると最初のプランをそっくり保存するか、それを捨てて、他のプランにとりかえるか、いずれかしかない。

私はこの告白の内容が検討を要するものであり、一面の真理の要約でしかないと言っているのである。因みに作者も右に述べられている疑念については、その当時まだ友人たちへの手紙のなかでは、あまり深く報告していない。

ただコポーにあてて二月十九日に、

少しでも読書や会話が長引くと、すぐに体温計がはね上がりまふ。マルセルを除くと、面会謝絶の止むなきにいたりまふ。二週間ごとのこのマルセルの見舞さえ、きまつて発熱と足のむくみを来たすのです。私は夢想に耽り、仕事の計画を頭のなかで組みたてています（この計画については、まだ申し上げられません。でも、もしこの計画が最後の発熱とともに霧散しなかつたら、おそらく貴殿を驚かすことでしょう）。

と書いているのだが、この仕事の計画というのが『自伝的文学的回想』のなかで「こうして途方にくれていた時、かなり唐突に、現代劇を一篇書こうという考えが湧いた」という別の作品の企画、つまり『無口な男』という現代劇についての着想だったのであり、これについては三月二日病院からジードにあてて、

しかし、八週間このかた眺めているこのエナメル塗料の天井が、仕事の再開をあらぬかたへと決定してしまつたようです。一月の末のある日、ジューヴェ一座の巡業の予定表が私の枕許に届いたのです。そこにジューヴェヤルノワールやヴァランチーヌやオーモンなどを再び見出して、楽しくなりました。俄かの結晶！ そしていまや、劇作品を一篇書こうという考えが、この病人にとり憑いたのです……………

と書き送り、三月十八日の日記のなかにも、

二月の初め、シャンゼリゼ劇場の予定表とジューヴェ劇団の写真に接して、かなり唐突に、劇作品を一つ書こうという考えが身中に湧き上がってきた。三幕物の現代劇（認容される性的問題のギリギリの線での心理研究）だ。二月に入つてか

ら、そのことばかりを考えつづけ、この計画を身中で熟させることに熱中した。この仕事をソヴエールに持って行き、三か月か四か月をそれに費したい。

以上に見るように、ジードとコポーへの手紙や『日記』に関するかぎり、『無口な男』という新しい企画の思いつきだけが語られている。しかし前掲の三月二日付のジード宛の手紙には、初めて『チボー家の人びと』の第七巻『出航準備』の完成を『無口な男』制作のために遅らせたがどうだろうという、相談にも似たものが現れてくる。まず『出航準備』の進捗状態を次のように説明する。

じつはこの冬に『出航準備』を完成したいと、重い気持で心に決めていたのです。(この巻は一九二九年に下準備をし、三〇年二月に書きはじめ、静脈炎と湯治とポンチニー懇話会のために中断、三〇年九月に再び取りかかり、自動車事故のときは制作の真最中でした)。この病院へも、第二部の各章を考える参考にと、ノート類を取り寄せさせしていたのです。作品はほぼ半分近く書いてありました。

こう言うてから『無口な男』という横道にそれてよいものかどうかと相談を持ちかける。

『出航準備』を放ったらかしてまで、ほかの誘惑に屈するだけの理由が私にあるのかどうか？ 私の読者たちが『父の死』に続く巻を待ち侘びてから、やがて二年になろうとしています。もしこの劇作品に乗りだしたら、私としてはそれを構成のシツカリした、私の能力の最大限にまで押し進めたものにしたいと思っただけに、八月までは充分かかります。またこの劇を来冬上演するのなら、冬の一部はそれで過ぎてしまうでしょう……危険は大です。いつ私の『チボー家』に戻れることやら？ いっぽう、私は自分が擱つてしまったと感じています。頭のなかにはほかの事は何ひとつないのです。

『出航準備』は私を打ちひしぎ、劇作品のほうは殆んど抵抗しがたいまでに私を呼びよせます。しかし、私は自分を強制し、
他を諦め、『チボー家の人びと』という大企画のためにそのような気紛れを犠牲にすることも出来ぬわけではありません。
(これが最初の犠牲というのでもありませんし)。しかし、自分でも怖しくなるほど、誘惑に屈しそうな思いでいっぱい
です……

虚心坦懐に、どちらがいいか貴殿の反応をお聞かせ下さい、友よ！ お待ちします。

しかし——私より貴殿のほうがお近しい神様にかけても！——この事は誰にも話さないで下さい。頼みます……

この相談にたいして、ジードは三月四日、電報で、「悲劇の女神と友人たちへの愛のために、誘惑に屈せよ、
ジード」と返事してきた。ジードは、『チボー家の人びと』一途に労苦を重ねている友が時たま横道に逸れよう
とするとき、かならずその浮気に賛成したのである。ここでも『出航準備』の筆を止めて、『無口な男』に取り
かかるほうがよい、という返事である。マルタン・デュ・ガールは三月中旬に退院し、やがて『無口な男』に着
手することになる。

ここで一応遡って、『出航準備』を含めた第四部以降の計画を振り返ってみよう。

四年前の一九二七年九月十一日に遡るが、マルタン・デュ・ガールは友人のフェリクス・サルシオーに次のよ
うに書いている。(この手紙はドイツ・シウク氏が『ロジェ・マルタン・デュ・ガール、小説家と歴史』⁽⁹⁾のなかに収録
しているもので、サルシオー夫人の許可により初めて公表したものである)。

私も仕事を続けています。『チボー家の人びと』が泥沼にはまりこんでいるとあなたに告げる人びとには、一九二八年の
復活祭と十一月のあいだに、次つぎと四巻の続編が出るだろうと言ってあげて下さい。すなわちそれらは、次の通りです。

第四部 『診察』

第五部 『ラ・ソレルラ(訳註¹¹原文のまま
ラ・ソレリーナのこと)』

第六部 『父の死』

第七部 『出航準備』

それから十八か月後に、大戦に関する二冊が出ます。

第八部 『不吉なるもの』

これらの後で、いよいよわれわれは問題の核心に入って行くことになります。なぜならば、これまでのところはまだほんの「プロローグ」にしか過ぎないからです。

この手紙についてショウク氏は次のように評している。

彼の出版された著作物のどこにも、マルタン・デュ・ガールはこれほど正確に、自分が『チボー家の人びと』の当初の計画通りにいかにその仕事を進めていたか、を指示してはいない。またこの手紙を見ると、マルタン・デュ・ガールが第一次世界大戦にたいする彼の態度をまだ変えていなかったことが明らかに見てとれる。ジャック・コポーと大戦後の計画などについて熱心に議論していたその時には、彼は「休止」であり「挿入句」のようなものだと見なしている。小説のなかでは大戦はできるだけ手短かに扱われることになっていたのであり、彼の言う「問題の核心」というのは、マルタン・デュ・ガールが一九一八年のピエール・マルガリチスとの文通(4)のなかで自分の最終目標として述べていた、個人の性格の深奥の分析となるものだったに違いない。

だがマルタン・デュ・ガールがみずからスケジュールを着々と進め得たのは、第四部と第五部だけだった。

右の計画のうち、自動車事故のあと、第七部と第八部が取り止めになり、やがてその代わりとして、一九三六年に『一九一四年夏』、一九四〇年に『エピソード』が書かれて、小説が完結されるわけである。だがこの間に、問題の計画大変更という苦悩の時期が挿まれねばならない。そして、今われわれはまだ一九三一年三月、作者がようやく病院生活を終えて、ひとまずわが家に帰り、まだままならぬ身で留守中の邸の整理などを済ませて、『無口な男』制作のために、弟が小さな住居を準備してくれたソーヴェテルへ向かおうとしている段階にあるわけである。まだ『出航準備』破棄の決意は固まっていない。それから三か月もたった六月十三日においてさえ、ソーヴェテルからコポーに出した手紙で、

私は進捗中だった作品、『チボー家の人びと』の第七部を計画のまま放つたらかして、この劇作品を書くことに意を決めたのです。

と書いているくらいだからである。

ただ些か注目に価するのは、まだ入院中だった三月の初めごろから、ジードとのあいだに、あの有名な『アフリカの告白』論争という往復書簡での激論が始まったことである。今ここで、計画大変更とは直接関係のないこの論争の詳細について述べることは避けるが（註参照）、ただこのやりとりのなかに見られる、計画変更を考へる上で間接的ながら若干の示唆を与えると考えられる作者自身の言葉について、触れておきたい。それはジードに向かって投げつけている次のような見解である（三月十七日）。

不敵なものであろうとなかろうと、大胆なものであろうとなかろうと、私は先入観や問題意識というものは避けたいと思

っています。私は何についても確信を持っていないし、モデルの複雑性を観察することができ、その複雑性を成す諸要素を数えあげることには努めるが、そこから決論を引き出すことはすまいとする慎重な肖像画家として、自分の見たものを描くだけにとどめたいのです。私は私の背後に蓄積されてきた教知を信じます…… われわれのヴィジョンがすべてを覆して新しい時代を聞くように見えたとしても、そんなものは束の間の果敢ないわれわれの眼にそう映るだけのことなのです……

このような見解はマルタン・デュ・ガールの小説家としての従来の態度を述べたものに過ぎないが、これが『チボー家の人びと』に行きつづまり、計画変更を前にした一九三一年三月における意見だという点で、些かわれわれの注意を惹くわけである。すなわち、この時点では、作者はまだショウク氏の言う歴史的意識の達成を充分にしているとは言えず、いまだ『チボー家』の前半を書いたころの心理状態、すなわち一九二〇年代の彼自身から大きく踏みだしてはいないということが解るのである。それから九月後の三月二十六日のジード宛の手紙にも、「しかし私も、貴殿と同じく、数か月以来人類の在りうべき進歩という考えにとり憑かれています」とは述べているものの、それに続けてすぐ、「なるほど芸術家は立場を決定し、何物かを証明するものかも知れません。自分の意志に反してでもです。なるほど、なるほど、そうかも知れません。しかしそれも、比重の問題であり、程度の問題であり、ニュアンスの問題です」と述べている。ここでは「数か月以来」という表現が気になるが、それが何を意味するか、これだけでは明確に出来ない、しかし、彼が『一九一四年夏』の作者となれる日はまだ程遠い状態にあることだけは確実である。

ともかくもマルタン・デュ・ガールは『チボー家』に行きつづまり、『無口な男』に心を逸らし意欲を燃やして、ただし回復のはかばかしくないその体をいたわりつつ、太陽を求めて「幸運にも弟が独り住まいの四部屋の小さ

な家を貸してくれた（四月十日付のジード宛ソウヴェールからの手紙）」南フランスの片田舎へと引越したのだった。そして、六月七日付でジードには、「私は仕事をしています。力いっぱいやっています。ジューヴェが私の劇を秋のシーズン再開早々に上演したいと言っているのです」と書き、コポーには六日十三日付で、「私は仕事をしていません。しかも……或る劇作品を書いているのです！」と書くほどまでに『無口な男』に熱中するにいたった。ただその『無口な男』を早く仕上げねばならぬという気持を書きとめている七月七日の『日記』のなかに、「雲行き些か怪し。暗雲がヨーロッパに垂れこめてきた」という言葉が見られる。ジューヴェが十月に上演したがっているから急がねばならぬのもあるが、只ならぬヨーロッパの風雲に急がたてられているのである、とも読みとれるわけである。

『無口な男』は八月にジューヴェたちの前で朗読され、まだ未完のまま取り上げられて、マルタン・デュ・ガールが湯治をしていた九月には稽古に入っていた。そしてそれは、十月二十九日に初演された。こうして、一九三一年は『チボー家』は全く放置されたまま暮れたようである。明けて一九三二年の一月二日、ベレームからのジードへの手紙に次のように述懐している。

暗い気持で年を終わりました。一年の決算は大したことはありません。『無口な男』はあんなに月日をかけての価値があったでしょうか？　そして凍りついてしまったあの『チボー家の人びと』には、いったいどのようにして戻つたらよいものでしょう？　ソースのなかで凍りついてしまったのですから、余計に悪いのです！　（最初に凍りつくのはいつもソースなのですが）。私はソースなしで『チボー家』のことを考えめぐらせています。しかし、かまとはつまり、食料貯蔵庫は空っぽのようです。エレメヌの健康も心配です。ここへ着くとすぐ、蓄積した疲労が彼女の上のしかかっています……

しかし、世界のあらゆるものが軋み出したような今はとりわけて、彼女の小さな私生活をごそ大事にすることが重要なことです。私は訳もなくベンを走らせてしまいました。それはご覧のとおりです。貴殿を抱擁し、貴殿のために、そう信ずることが出来ぬながらも、一九三二年がよき年であるよう祈ります。

やはり『無口な男』は一時の逃避に過ぎなかった。一時の気晴しが去ったあとには、收拾つかぬまま放置された『チボー家』という怖い現実が、その大きな図体を横たえて待っていたのである。右の手紙では、ソースが凍りつき、食料貯蔵庫は空っぽになったと述べている。これは最初に私が長ながと『回想』から引用した作者自身の『チボー家』についての反省というくだりが、一面の真理を要約した表面的な説明に過ぎないことをよく証明してくれる。『回想』のなかで「主題にいささかも疲れは感じていなかった……一種の安定感に支えられ、それが躍動をたやさずにきた……」というのとは正反対の状態に落ちこんでいるわけである。問題は「物語の流れをひどく遅らせる」とか「作品の統一と釣合い」などということではない。内容的に致命的な行き詰まりが来ているわけなのだ。

なるほど『回想』は病院のベッドの上での思索について述べたのであり、それから一年近くがたっていると見えるかも知れない。しかしその一年間に、マルタン・デュ・ガールは『無口な男』への逃避がそれを証するようになり、『チボー家』については脳中に一種故意の思索停止があり、そこにはなんの進展もなかったと考えてよい。そして、半意識的に怖い現実にたいして眼をふさぐことに懸命だったマルタン・デュ・ガールが、この一月まですの重大性を真に自覚していなかったということになる。次の手紙がそれを裏づけてくれる。それはマルタン・デュ・ガールがヴァン・リセルベルグ夫人にあてた一月一日付の手紙であるが、ここに、再び自分の原稿に

眼を通して愕然とする作者の姿が浮かび上がる。

かなり力落ちしてル・テルトルに帰ってきました。私は自分が『チボー家の人びと』の一卷をほとんど完成していたと信じていたのです。そして、この数週間、それに鼻を突っこんでみましたが、そこにはまんろくなものは何ひとつ、何ひとつ、見出せなかつたのです……そこで私は、一九三〇年の仕事全部を紐で縛りあげてしまいました。二度と開かず、煖炉に持って降りるつもりです。これまでは何もかもが巧く行って、なんの勇氣も強要されませんでした。しかし今後は、またやり直さねばなりません。だのに、やろうという気が起きません。私はまるで一年このかた、自分のトランクがいつぱいになっていると信じこんで、それを開きもせずに持ち運び、突如としてそれが空っぽだったことに気づいた旅行者のようなものです……

『出航準備』破棄の決意はこの頃に固まったのだろうか？

一月二十七日にはジードにあてて、「始めることのきわめて困難な仕事で心を占められています。だからもう少し、沈黙と孤独が必要なのです」と書き、ジードは翌二十八日に、「貴殿が、そして『チボー家』がどうなってしまったのか、とても心配です」と返事している。では作品がソースのなかで凍りつき、貯蔵庫が空になってしまった、とはどのような状態を意味していたのか？ 一月二十二日付の次のようなコボー宛の手紙がこの点を解明するための重要な参考資料としての意義を持つてくる。そして、ここに初めて、本稿で問題とするマルタン・デュ・ガールの時代への反応と彼の苦悩との関係が暗示され、しかもこれ以後、まるで堰を切ったように、書簡のなかに政治問題への言及が流れこんでくるのである。

いま、きわめておぞましい瞬間を通過しています、友よ。昏乱は極度に達しています。自分の心中に異様な嫌気を感じるのです。重苦しい自分の家が甲殻のようにかかっています。『チボー家の人びと』という気違いじみた企画も私を押しつぶし、いまあらゆる喜びを禁じてしまっています。自分のために打ち建てたこの二つの生活上の堅固な要素が、その土台から揺らいでいるのです。これは一時の減衰というものなのか？ それとも昏乱は深いものなのか？ それは全然解りません。家のことについて言うと、生活のやりかた、経費、そうしたものの全部がとも重くのしかかって、軛となり、私を限界づけるのです——それについては貴殿が来たときに、すぐお話ししましょう。

いっぽう『チボー家の人びと』について言うと、次のような具合なのです。一九三〇年に書いたほとんど完成していた巻を、こんど再び採り上げてみたのです。その結果は失敗した作品の前に立たされることになりました——だがこれだけならなんでもありません——私はとくに、もはや私の心になんの対応もしない、つまり今日の私になんの関係もない作品の前に立たされたのです。ですから、この巻を焼き捨てた場合、自分に対して厳し過ぎるかどうか考えることなど、問題ではありません。たとえこの巻がそれ自体よく出来ていたとしても、もはやこのようなものは望みはしないでしよう。それに署名する気にはとてもなりません。どんなに重体に陥っているか、解っていただけでしよう。これは何に起因しているのか？ 過ぐる三一年に、どのような大きな断絶があったというのか？ それは交通事故か、病院生活か、ソヴテールか、『無口な男』か、パリでの三か月か？ また世界の情勢——あらゆる声、内心の声までをも覆い尽くすあの耳を聳する崩壊の物音——が私の心中に見られるこの変化に、どのような影響を与えているのか？ 解りません。おそらくそうしたものの全部がいっしょくたになっているのでしよう。しかし事実も厳としています。私は力を抜き取られてしまいました。この冬に完成して春に出そうと思っていた二つの巻のうち一つが煖炉のなかに向かおうとしているだけでなく、さらに怖しいことに、私はこの仕事の前で捧立ちになり、『チボー家の人びと』そのものにはないにしても、少なくとも以前に建てたような私の計画の後半に顔をそむけてしまっているのです。それに対して吐き気を催すのです。それはもはや、私の内に生きているものに

は何ひとつ応えてくれず、内心の深い要請のどの一つにも応えてくれないのです。かと言って、どうやって二つに分割することなどできるでしょうか。

ここに言う「失敗した作品」とは、「たとえそれ自体よく出来ていたとしても、今日の私になんの関係もない作品」なのであり、そのように感ずる作者自身の心境の変化は、「世界の情勢——あらゆる声、内心の声までも覆い尽すあの耳を襲する物音」による変化であることは、右の文面から明白な事実と言ってよいだろう。ただし、文面からも察せられるように、それはいまだ半意識的な状態にある。しかし思うに、親友にあてた書簡および彼の日記以外に、これほど切実な真実の声を聞くことは、この作家の場合ほとんど不可能なことなのである。

このような絶望的状态からの脱出は突如としてやって来た。この点に関して、一九三二年二月五日という日付がこの作者自身にとっては重要な一つの転回点となる。すなわちこの日、思いがけなく唐突に、それまでの計画に代わるべき、『チボー家の人びと』完結の企画についての靈感が訪れたのである。彼は狂喜して、ただちにその夜ペンを執り、ジードにその感激を打ち明けている。

まず最初に貴殿に、一大ニュースをお知らせします！ 今夜私は——言わば芸術の精霊の一撃を受けたのです！ つまり素晴らしい立ち直りを私に許す、思いがけない靈感の閃きです。私は『チボー家の人びと』を小さな二巻で完結する方法を見出しました。以前に予見したあらゆる事よりも、百倍も優れた意味と重要性を作品に与え、わが身を庄倒する大仕事からきれいに抜け出し、今から二年以内に、自由で、陽気で、新しい作品へと飛びこんで行ける人間に立ち帰る方法をです！ われ復活す、ハレルヤ！ 私はあの瀕死の六週間を措しいとは少しも思いません。墓石は持ち上げられたのです。それにしてもなんと悪夢だったことか！……………

このあとにマルタン・デュ・ガールは、これがまだ思いついたばかりのもので、誰にも言っていないことだから、絶対に他言しないでくれとせがんでいる。ではこの思いがけない靈感の閃きとは、どのような内容を持っていたのか。私はこれを計画変更の第一次の試みと考えるのだが、この内容については、その同じ二月五日金曜日の夜に、ル・テルトルで興奮のうちに書きとめた『日記』がこれを詳しく述べている。

一年以上にわたる声もたて得ぬ不安ののち、そしてほとんど瀕死の状態に近い物凄い危機の六週間のもの、ついに復活！今夜、思いがけぬ靈感、私を開放する俄かの一条の光明を持った！私は『チボー一家の人びと』の結末を把握している。ただたんに結末たるに止まらず、その有終の美をである。突如として『チボー一家の人びと』を新たな二巻で、しかも、それだけでも一つの勝利だが、名誉ある方法というだけでなく、作品全体に、それを完結し、充実し、思いがけぬ重要性を与える一つの意味をもたらすような方法で、堂々と完結するのだ。

アントワヌとジャックは父の遺産を受け継ぐ。そして数か月のうちに、この巨大な財産が彼らを毒し、彼らの全面的挫折を確立し、彼らを解体に導く。これが『財産』という巻である。

戦争が勃発する。これが『不吉なるもの』である。兄弟は腐敗した資本主義社会の残滓と成り果てている。死が次々に彼らを奪い去って行く。チボー家は戦争のうちに無に帰して、この世から姿を消し去る。そして、戦争が彼らと共に無に帰せしめるのが、一つの社会全体、一つの形態のブルジョア階級全体となる。

これでもって私の作品『チボー一家の人びと』は、深い意味あいを獲得する。頽廢した一つの世界の描出と、その世界の血なまぐさい一大災厄のなかでの終焉。一つの社会の清算(そして私にとっては『チボー一家の人びと』の清算……)。

今夜は神経が興奮し過ぎて、頭のなかに湧きだっている全てのものを正しく書き誌すことが出来ない。だが要するに、数か月以来私を悩ませ続けた命にかかわる問題の解決を見出したのだ。そこからはとても脱出できぬと絶望し、十年前に立て

た計画、そして文字通り噴出しようとする活力を自分の内で窒息させずには直面できなかつたあの計画の重みの下で、まずまず埋没させられ、葬り去られる思いのしていちやうどその時に、すべてが吹き払われ、私は自由にたち戻つたのだ。

今から一年後には『チボー家の人びと』を完成しているだろう。しかもきれいに完成しているだろう。今夜まで思つても見なかつたこの予期せぬ、ほとんど不意に訪れたこの結末は、以前に考え出した計画のすべてより、遙かに意義深いものと思われる。この結末の意味と輝かしさは、作品全体に、その決定的な均衡と、その教訓と、その重要性をもたらす……

この第一次計画変更に見る『チボー家』の後半の計画を見ると、冒頭に掲げた『回想』からの引用文に見た十年前の原案と、それはなんと内容の変化を示していることか！

原案では、大戦後のヨーロッパはまるで一九世紀ふうの安穩なヨーロッパでしかなかつた。そして、そこに語られる筈だつたチボー家の子孫たちはたんなる心理主義的な人間研究の対象でしかない。しかも、そのような呑気な人間研究が第二次大戦の来たるべき時期ぐらゐまで続けられることになつていたのである。それが二月五日の靈感の訪れによって、第一次大戦までで『チボー家』シリーズを締めくくるといふ決心に変わり、「その世界の血なまぐさい一大災厄のなかで」チボー家は滅び、一つの社会全体も、すなわち頹廢したブルジョワ社会も崩壊する、という結末の予想となつた。『財産』『不吉なるもの』という二巻でなされるはずのこの結末のつけかたは、実際に書かれることになる『一九一四年夏』『エピソード』という決定稿に大いに近づいていゝと言へる。実際に書かれた『チボー家』のこれら結末もまた、小説を第一次大戦初期で締めくくり、ここでチボー家は滅びるのだからである。しかし、この二つの結末を仔細に検討するならば、両者のあいだにまだ根本的な相違があることが看取できよう。すなわち、二月五日の第一次計画においては、まずチボー家の兄弟を滅ぼすものが、彼

らが父から受け継いだ遺産という毒薬に過ぎないということである。作者が焦点を合わせるのは、端的に言って「頽廢したフランス・ブルジョワ社会」の崩壊ということに過ぎない。この点は決定稿にも盛りられる一つの重要要素ではあるのだが、問題は第一次大戦とチボー家兄弟ということであろう。二月五日の第一次計画では、大戦が始まったときには、チボー家兄弟はふたりとも、すでに「腐敗した資本主義社会の残滓と成り果てて」おり、ただそのなれの果ての身で戦争に殺されに行くというものであるらしい。ジャックがみずからのブルジョワ出身という境遇を克服して、作者自身の絶対平和主義と生来の反抗的意欲のためにインターナショナルに加わり、理想主義者としての死を選ぶのでない以上、そしてアントワヌが毒ガス中毒患者となって初めてヨーロッパの行末に、そして人類の将来について最後の思索をするのでない以上、そこには『一九一四年夏』『エピソード』に見られるような歴史性と思想性は望むべくもないはずなのである。第一次計画は決定稿に向かつての一步前進ではあったが、それとは根本的にスケールの違う構想と言わねばならない。大戦とフランス・ブルジョワ社会という構想と、大戦とヨーロッパもしくは戦争と人類という構想とのあいだのスケールの違いであり、作者の意識におけるスケールの違いである。その意識の違いを示すものとして、この一九三二年前半におけるマルタン・デュ・ガールのドイツに対する理解を明らかにしているジード宛の書簡を瞥見することは、この際誠に興味あることと思われる。すなわち三月にベルリンを訪れたマルタン・デュ・ガールは、十九日に、ベルリンから潑刺たる気分を想像させるドイツ語による手紙をジード宛に送り……………(Ich bin sehr frohlich! Alles ist für mich so neu und so amusant!…………)。帰国後四月一日には、ベレームから、むしろ些か首をかしがせる、次のようなことを書き送っているのである。

……………ベルリン……………ほとんど旅行しない私にとって、この潜在は異常なほどの重要性を帯びます。私は一種素朴な心酔を禁じ得ませんでした。あらゆるものが言語を絶して私を魅了したのです！ 私は征服されて帰って来ました。町のありさま、その格別の活気、人びとの愛想のよき、風俗の素朴さ、個人どうしのあいだのあらゆる関係の柔かさ、若者たちの美しさ、彼らの生得のエレガンス——通常言われるのとは反対に——もろもろの思想の発展、こうしたあらゆるものが私を魅惑しました……………風俗としては、十七年このかた休む間もなく苦しんできたこの国の若い世代が、古きブルジョワジーの金のかかる楽しみに替えて、スポーツだの、水泳だの、自由恋愛だの、遊戯だの、真に異教的でディオニュソス的な自由という、自然で金のかからぬ喜びを追求しているそのありかた……………政治的には、言論機関への憎悪、あらゆる政府への憎悪と不信、国境を越えた人間間の友愛という漠たるものながら強烈な感情、不屈の個人主義と烈しい所有の感覚（これがわれわれにおけるよりさらに強い）と平均のとれたコミュニズムへの志向。しかも未来への熱意、ついに人間の運命をより良きものに出来るという確信、富を人間のあいだで、しかも地球全体の人間のあいだで分配し直そうという理想、そこには、わが国では見出せぬような若い力と信念の可能性が感じられます。おそらく、光は東からわれわれのもとへとやって来るでしょう。あのように異質で、いまだあのように同化し難い方式を持つあのスラヴ的な東からではなく、かくも近しく、西欧的でもあるこの東からです……………

また五月二十七日にも、ベルリンに赴いたジードにあてて、そのドイツ礼讃を続ける。

貴殿がベルリンにいと知って、非常な興奮を感じます。羨しいという烈しい感情を禁じ得ません。あの土地で過ごした十日間は、是非は別として、あの土地こそが、嘘でなく、決定的に、そして完全に私に適した土地だという気持をきわめて強く私の心に植えつけました。もし私が自由で独り者なら、私が行って住みたいのはベルリンだ、と羞恥心なしで言い切れます。ドイツにおいてこそ新しい文明の一形態、すなわち、まさにわれわれが待っている文明の形態が生まれるだろうとい

うことは考えてよいように思われます。つまり、適合するにはまったく犠牲の多すぎると思われるソヴェエトの文明でなく、私を悩ませる諸問題の解決を見るような文明です。ますます過小評価できなくなってゆかれわれの西欧的個人主義と、私有財産という制度に付きものの忌むべき社会的不正と、数人の者による大衆の搾取を、一時的に緩和する国家資本主義という柔軟な組織、との融合ということです。クルチュエウスは外国人たる者はベルリンに来て、「当代ダイナミズムの熱狂的展開」を体験すべきだ、と書いています。

ヒットラーが政権につくにはまだ一年の余裕のある一九三二年五月という時点におけるドイツの流動的に見透しの困難な状況、そして西欧諸国の当時のドイツへの対処のしかたを斟酌するとき、右のようなマルタン・デュ・ガールのドイツ観というものを一概に批判できる人はそう多くはいなかった筈である。この時期にヒットラーがドイツおよびヨーロッパの人びとにどのように受けとられていたか、また再三マルタン・デュ・ガールがソヴェエトを意識しつつ述べているようなドイツへの期待が、西欧諸国でもどのように奇妙に保持されていたか、このような国際事情についてあまりここでは詳述する暇がないが、右の手紙にはそうしたドイツ上層部の複雑な動向というよりは、むしろ壮烈な権力争いと選挙戦で混乱していたドイツ各党の動きをよそに、ヴェルサイユ条約を破棄した新興ドイツの一般青年層が見せていた自由解放への盛り上がり肌が肌で感じ取られているわけである。とは言っても、この時点におけるマルタン・デュ・ガールの意識のなかには、その一年後に政権を掌握したヒットラーがやがて醸し出すことになる戦争の脅威というものへの予感ほ、いまだまったく看取できないことも事実である。この楽観的な意識は、それから一年後に、マルタン・デュ・ガール自身のおいて直ちに変更を余儀なくされるのだが、それはともあれ、今マルタン・デュ・ガールにとつては、ドイツから来たるものは戦争で

はなくて、新しい文明というものでしかない。これこそが、私が前述した第一次計画変更当時の意識と作品計画との因果関係なのである。すなわち、二月五日の第一次計画変更の案の内容が、チボー家の兄弟がただ父から受け継いだ遺産によって滅びるというフランス資本主義社会への批判に止まっただけで、問題がフランス内部にあり、いまだヨーロッパ的次元に拡大を見ぬ状態、すなわち歴史的存在であるよりは、いわゆる一九世紀的な社会的次元に焦点合せが堰きとめられているのは、実にこのような作者の意識から招来された結果なのである。このようなフランス一国的次元、社会的次元を証拠だてるものがある。すなわち、この時期に第一次計画変更の案をそのままにして、マルタン・デュ・ガールはまたしても横道に逸れたかと思わせる作品『老いたるフランス』の制作に没頭して行くのだが、この『老いたるフランス』という標題がこの際、非常に深い意味を持ってわれわれの注目を惹くのである。『老いたるフランス』という標題がその内容に照らして、あまりにも大きな標題であり過ぎはしないか、という感じ、これはこの小説を読む誰しもが抱く感想であろう。しかし、右に掲げたジード宛の手紙に見るドイツへの讚美を見れば、この大きな標題の意味も、対照的に歴然としてくるのではあるまいか。右の手紙のなかで、マルタン・デュ・ガールは次のような暗示に富む一行を書き加えている。すなわち、『老いたるフランス』について、

私はこの小作品でフランスのある村という小宇宙を舞台として、われわれのものたる弁護の余地ない世界を描き出そうという考えを持って出発したのです。

「われわれのものたる弁護の余地ない世界」、これがドイツと対照して省みられたフランスなのであり、そこに

描き出された小宇宙はまた、二月五日の計画案のなかで崩壊させられるべきフランス社会の皮肉この上ない象徴なのである。このようにして彼のドイツ観は、二月五日の第一次計画変更に見られる作者のいまだ低次元の意識変更計画の性質を説明するものとなる。

マルタン・デュ・ガールの一九三二年におけるドイツ観は以上のようなものである。だが、このことはマルタン・デュ・ガールの心中に当時急迫していた歴史的意識の存在を全く否定するものともならない。ドイツがもたらすべき戦争の危険という意識を除くと、当初の計画で見失ったような呑気なヨーロッパ、という構想を許さぬ、経済恐慌以後の世界情勢の急迫を、彼は充分に感じとっているのである。それならばこそその計画変更であった。たとえば、やはり右の同じ手紙のなかに次のような言葉があるが、日本に関する言及でもあるので、一つの例に過ぎないが、参考までに掲げて見よう。

日本のロシアにたいする挑戦的姿勢は、明らかに西欧資本主義諸国がそれを支持するよう団結する準備ありという確信に支えられているのに違いない。そしてこれこそ、前例のない一大動乱となるのです！人間の腐敗、愚かさ、これには際限がありません。これと、時どき私は眼が涙で一杯になるのです。これは本当のことなのです。

また六月十三日ジード宛の手紙では次のように書いている。

肉体的にも、精神的にも、物質的にも、非常な苦境が——現在の世界の姿、これは一つの符合でしようか？——私の五十年代の初めを司っています……世界の情勢と私自身とが私を陥れている状況の不条理さが、私に絶えがたい苛立ちを起させます……世界のざわめきがこの個人的な苦悩に、耳を聳するような怖しい伴奏を奏えます。

ただ私は、世界情勢の混沌と言っても、ドイツに直接的不安を感じるか否かということとは決定的な意味を持つ、
と言いたいのである。

さて、一九三二年の後半から一九三三年のドイツの政情の急変と殆んど時を同じくして、マルタン・デュ・ガ
ールの文学意識もまた急変を見る。そして、一九三三年二月、ついに前年二月五日の第一次変更計画を乗り越え
た新しい計画案が樹立されるのである。このようにして、一九三二年二月について一九三三年二月は『チボー家
の人びと』にとつての重要な曲り角となる。それを二月二十二日付のジード宛の書簡で見てもみよう。

真直ぐに一九一四年七月の総動員令へと飛び込んで行く決心をしました。非常に複雑な文献踏査という大仕事、これが、
このために十年このかた蓄積したノートと書類の大海に埋没することを要求します。しかし、ごく順調に進んでおり、私の
精神のなかでは、戦争のなかでのチボー兄弟の終焉というこの結末のために、すべてが明らかに描き出されています。私は
一部、以前に計画したように強く「金銭による解体」という問題に専念することは断念しました。それも扱います。しかし
二義的なものとしてです。前面に押し出されるもの、それは戦争です。一四年七月の盛り上がり、ジャックの反抗、苦しみ
のなかに運び去られる私の作中人物たち。私はそこに激烈な効果を生む題材を見ます（その効果は『チボー家の人びと』の
このような結末を、ドレフュス事件の『ジャン・バロワ』に再び親近関係を持たせることになるでしょう）。公的生活が私
的生活に緊密に混ざ合わされるのです。

これが第二次計画変更と考えてよいものであり、『一九一四年夏』と『エピソード』への方向づけを告げるも
のである。ただし「十年このかた蓄積したノートや書類の大海」は、ここで作者自身が考えているほど充分に役
立つものではなかった。ここから作者の真の苦しみが始まるのではある。だが、それはともあれ、ショウク氏の

言う「歴史的事件の個人的次元への置き換え」が右の引用文の最後の言葉で決意されている。方針は定まった。そして、それから三日後のジード宛の手紙には、本稿が浮き上がらせることを願う問題、つまり一九三〇年代初期という制作の時期における歴史的状況が、制作しつつある作品の内容たる第一次大戦前夜のヨーロッパ情勢分析、すなわち大戦の原因究明という内容に及ぼす影響、を如実に説明してくれる。

現時の不安の倍音のように唸りを立てる回顧的感動。一九三三年と一九三一年とのあいだに見られる類似には、時おり胸を打つものがあります。このバルカン半島の不穏な情勢までが！……………盲めくらでもないかぎり、ヨーロッパの上に急速に（そして不可抗の様相をもって）拡がって行くこの暗い影を認めぬわけにはゆきません。私は時おり、革命だけが新たな全面戦争を回避できるのだ、と考えることがあります……………これが——『チボー一家の人びと』について——「遺産に よる崩壊」という主題を扱うことを一部断念させられた理由です……………そのような題材は『父の死』と『戦争』とのあいだに挿入されることになり、それだけ作品を長つたらく、するからです……………しかも私は戦争をごまかすことは出来ないのです……………

いまや『チボー一家の人びと』は真に充実した結末をもって、立派に接ぎ木され、息を吹き返えすべく準備された。マルタン・デュ・ガールはこの起死回生の企画を実現すべく仕事に沈潜して行く。しかし作者にとつての問題はこれからである。その作業がいかに至難なものであるか、それは仕事が進めば進むほど明らかになって行った。この年も終わろうとする一九三三年十二月三日に、マルタン・デュ・ガールはコポーにあてて、次のように書くのである。

私は仕事をしています。私は溺れ、沈み行かんとしています。自分の企てを最後まで持って行くのに、たいへんな苦難があることが思われています。『チボー家』を二巻の大冊で終わり、その大部分が一四年七月末を扱うという計画です。あの『ジャン・バロワ』でドレフェス事件さなかのフランスの雰囲気を描こうと努めたあれと同じように、この悲劇的時期の不安な雰囲気を喚起したいと思っています。しかし、こんどの場合は、もはや訴訟事件というのとは問題が違います。こんどは、戦火のヨーロッパ、各国政府間のポーカーク試合、インターナショナルの革命的盛り上がりが対象です。そして、この渦巻きのなかに作中人物たちの個人的運命を投げこみ、そこでそれを追わねばならぬのです。今回ほど自分がみずからの仕事に不向きで、仕事を巧く運ぶ力量に欠けていると痛感させられたことはありません。進めば進むほど、考えも実行もむずかしくなるのです。私はますます書きにくくなっています……

専門家マルセル・ラルマンに指導を仰ぐというような率直な努力を含めた、作者渾身の力を振り絞った成果たる『一九一四年夏』が世に問われるのはそれから三年後の一九三六年、そして『エピソード』が完成されるのは、すでに第二次大戦の始まっていた一九四〇年でしかない。

さて、本稿では以上のように、一九三〇年代初期における作者の意識の変化と計画変更との関係を跡付けたのであるが、いっぽうにおいて諸家のあいだには、『チボー家の人びと』の内容変更の必要性は、作者の無意識の歩みのなかにおいても、また作品そのものの内的必然性からも、もっと早くに始まっていたとする見解が多く見られる。というより、作品が発表されつつあった初期において、すでに批評家たちが、早晩ある変更が要求されるという意見を述べているのである。例えば、この小説の最初の二つの部分が出たばかりの一九二二年すでにバンジャマン・クレミューが、この小説に日付が明示されていないこと、つまり、話が大战前のことなのか大战

後のことなのかが不明であり、これでは歴史的感覚に欠ける、と指摘している。これはその通りであって、ここにマルガリチスへの手紙で決意したような作者の創作態度が招来した結果があるのだが、確かに小説は最初からあるジレンマを予想させる出発をしていたことになるのである。またショウク氏によると、一九二六年には、すでに作者自身が重大な疑念に陥っていたらしいふしがある。すなわち一九二六年十二月ルイ・マルタン||シヨフイエにあてた手紙(これをマルタン||シヨフイエは一九六〇年に公表した)のなかで、作者は、超克不可能な困難に直面しており、作中人物たちの心理にさらに深く浸透せねばならぬという、作者にとっては生か死かの問題に逢着して怖い恐怖を感じる、と訴えているのだが、これについてショウク氏は、さらに深く浸透するための方法は、作中人物たちを歴史と直面させることに他ならなかったろうと言っている。また、アンリ・ビドゥーは『診察』と『ラ・ソレリーナ』のなかに、ますます高まりゆく緊張の度合を看取り、J||B・スヴラックならびにアンドレ・テリーヴも、やはりこの二つの部分が大戦前夜へと筋を盛り上げている、と指摘している。そして、オスカル・チボーの死とともに(『父の死』一九二九)チボー・シリーズの最初の部分は幕を閉じたと見るクレミューの見解は、すでにここで必然的に、作者の新たな展望への要求を含むものである。最近に出版されたローザの「ロジェ・マルタン・デュ・ガール、偉大なる平凡の再発見」¹⁰⁾はこの点について、簡潔ながら注目に価する構造的な分析を行なっている。(なお、その古典悲劇との対比研究は実に興味深い)

以上のように、計画変更の必然性のきざしは作品発表当初から存在したのであり、作者自身も、ショウク氏の手言うごとく、少くとも一九二六年からそれを予感していたという考えは充分成り立つわけである。しかし本稿では、そのような作品自体に存した内在的圧力と作者自身の半意識的自覚という事実はいったん置いて、作者

の現実の声と信じて差し支えないと考えられる書簡ならびに日記のなかに、明確にそして具体的に作者の意識上に結晶をみた事実だけを跡付けて見たわけである。そしてこれがあながち真実を曲げるものでなかったことは、例えば、第一次計画変更と第二次のそれとのあいだにおける推移とその落差の問題が、これをよく証明してくれると考えるのである。

註(1) シード宛の二月二十一日付の手紙。

(2) 拙訳『文学的回想』(法律文化社) p. 79.

(3) David L. Schalk "Roger Martin du Gard, the Novelist and History", Cornell University Press, 1967. (拙訳出版準備中)。

(4) ビニール・マルガリチスはマルタン・デュ・ガールのいとこにあたり、音楽家としての才能豊かな人だったが、一九一八年十月三十一日、スペイン風邪で急死した。その一九一八年にマルタン・デュ・ガールは軍隊生活の一時の暇をみて、手紙を交わして文学上の相談をしている(N・N・R・F・一九五八年十二月、マルタン・デュ・ガール特集号に収録)。そのなかで、次の小説の企画について熱心に述べており、その表題は『善と悪』とするように言っているが、これが『チボー家』として実現されるものの仮の題であったろうことが想像される。マルガリチスへの手紙では、『ジャン・パロワ』が思想や歴史的配慮にみちてはいるが、結局その中心はパロワという人物の精神的遍歴、人生の根本的命題である老衰と死、そして主人公の感情的・心理的展開であり、そこにこそ自分の作家としての使命があるのだから、今後は書齋での文献渉猟や、資料による知的な小説制作方法は捨てて、街に出て直接人生に触れ、みずからの感動によって制作したい、ということを力説している。すなわち自分のなかにある古文書学院生の素質を殺すべきだ、と考えたのだ。マルガリチスはこれにたいして、むしろ不安の念をもって答えているが、マルタン・デュ・ガールはその決心を強く訴えた。そして『チボー家』の前半はマルガリチスに述べた、そのような作風でもって綴られていると考えてよい。なお、このマルガリチスに『チボー家』は捧げられており、ジャック・チボーのモデルとしてもこの人がよく挙げられる。

(5) 『アフリカの告白』は近親相姦(姉と弟)を取りあつた短篇小説で、作者が旅行中に識りあった男の打ち明け話を記録した、という形式になっている。イタリヤ人レアンドロはアマーリヤという実の姉と通じ、四年間も関係をつづける。レアンドロは兵役につき、アマーリヤは弟の子をみごもったまま年配の男と結婚する。生まれた子どもミケーレは体が弱く、早死にする。アマーリヤはデブプリ

と争とり、幾人も子どもをもうけて、過去のあやまちをケロリと忘れ、むしろミケレの死を、邪魔物ばらいできたと内心よこんでいる。姉弟のあいだには何事もなかったような平気さである。しかしミケレを死なせたレアンドロの心は痛む。案の上、シードはこの作品にとびついた。そしてその事が、以外にもマルタン・デュ・ガールとシードとのかなり長い不和の原因となった。近親相姦から生まれた子どもを虚弱体質としたマルタン・デュ・ガールを、シードは現行道徳に従いすぎると批評したためである。シードはこの道ならぬ恋を賛美し、それから生まれる子は輝しい理想児でなければならぬとしたのたいてい、マルタン・デュ・ガールは、自分は道徳学者でも反道徳家でもなく、ただの物語作者なのだを主張すると同時に、シードの反道徳家どりを彼の作品の欠陥の原因とののしった。おたがいが相手の恥部を突きあつたのである。

(6) 参考。「私にとっては、内容と形式は、兎の肉とそれに合わずソリスのように峻別される。兎はシチューのなかから生まれるだろうか？ 井上君の兎が良いかどうかを確かめよ。疲れた老いは兎においてソリスを合わせて満足してはいけない。『拙訳』文学的回想』 p.97.)

(7) “La Fortune”

(8) “Le Sinistre”

(9) 「『赤い心』及び『古い France』という標題を『サムソン』という通り名を排して、『拙訳書』『老いたるサムソン』(三修社)と訳出した」との旨を証明せよと考える。

(10) Robert Roza, “Roger Martin du Gard et la Banalité Retrouvée”

参考文献

- Jacques Copeau=Roger Martin du Gard, *Correspondance*, tome II (1929—1949), Gallimard, 1972.
 André Gide=Roger Martin du Gard, *Correspondance*, tome I (1913—1934), Gallimard, 1968.
 La Nouvelle Revue Française (Hommage à Roger Martin du Gard), 1958.
 David L. Schalk, *Roger Martin du Gard, the Novelist and History*, Cornell University Press, 1967.
 Robert Roza, *Roger Martin du Gard et la Banalité Retrouvée*, Didier, 1970.
 その他マルタン・デュ・ガールの作品。